

津島山車蔵の修景・改修

山車蔵をより魅力的な観光資源に

大河原 章介

昨年十二月一日にユネスコの無形文化遺産として、津島市と愛西市の祭「尾張津島天王祭の車楽舟行事」が登録されたことは記憶に新しい。このことで本祭はいつそつ世界から注目を浴びることになったわけだが、津島市には「津島秋まつり」など、毎年多くの観光客を魅了する祭が他にも存在する。本レポートでは昨年度に我々が関わった、この「津島秋まつり」で使われる山車を格納する「山車蔵」の修景・改修事業を紹介したい。

歴史や多くの祭のあるまち津島

愛知県尾張地方の西部に位置する津島市は、鎌倉時代から天王川の湊町「津島湊」として、室町時代中頃から津島神社の門前町として、江戸時代には佐屋街道の宿場町として長らく繁栄してきた。一時は尾張一豊かなまちとして知られ、「信長の台所」と称して織田信長を経済的に強力にバックアップしたとも言われている。また、このように長い歴史を持つ津島市には「尾張津島天王祭」をはじめ、「藤まつり」「津島秋まつり」などの魅力的な祭が多くあり、毎年多くの観光客を引き付けている。

山車蔵の現状・取り巻く課題

「津島秋まつり」でまちを巡行する山車は実に十六輛もあるが、山車を普段格納しておくための山車蔵がそれぞれに存在し、津島市の天王通り周辺の住宅街の中でひっそりと建っている。まちなかを歩いていると突如目の前に現れるこれら



写真1：黒基調が映える池町山車蔵

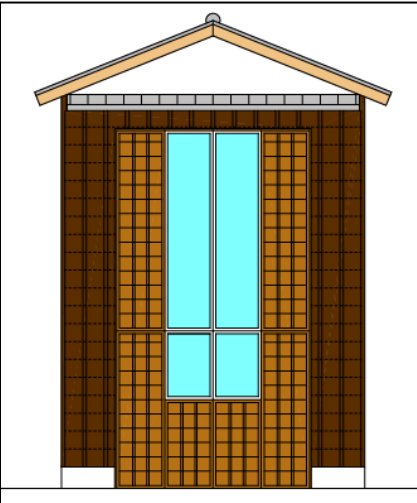


写真2：デザインI (ガラス窓仕様)

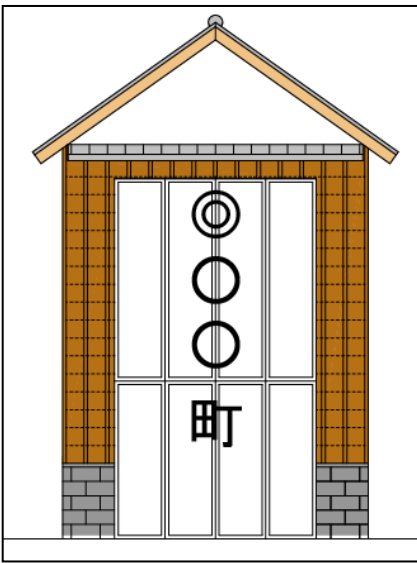


写真3：デザインII

デザインに山車蔵らしさを盛り込んだり、統一感を持たせたりすることで、魅力という点でそのポテンシャルをまだ引き出す余地を残しているはずなので残念な現状である。

山車蔵の魅力向上に向けて
こうした現状の中、山車蔵等の文化財

の山車蔵は、その大きさや歴史的な趣を持つ意匠から、まちを訪れる観光客などに大きなインパクトや感動を与えるに違いない。

しかしながら山車蔵を取り巻く課題も多い。まずデザイン的に、一見して山車蔵と判別しづらいものがある。また現在津島市として統一したデザインを定めていないことにより全体的にまとまりに欠ける。次に、老朽化のためすぐにでも修理をしたいと考えている町内もあるが、町内の軒数の減少により財政的に厳しく修理ができない。担い手不足につながる町内の高齢化も大きな懸念材料である。

新しい山車蔵の姿をめくって

基本デザインや補助要綱は山車を所有する各町内の関係者を中心として、全四回に亘るワークショップでの意見交換を通じて決定したが、山車蔵らしい趣のある基本デザインができ上がった(写真2、3)。各町内や津島山車保存会など実に十四もの組織が一同に会し様々な意見が飛び交ったが、苦労しながらも一つの合意形成ができたことはとても意義深い。

改修・建て替え等の補助期間は平成二十八年度から平成三十一年度までであり、仮に山車蔵の建て替えが実現するとなると、早くも今年度末か来年度頭頃になりそうである。生まれ変わった山車蔵の姿を見られる日を楽しみにしたい。

空き家活用による創業支援

津島市での取り組み

石田 富男

津島駅と津島神社を結ぶ天王通り。津島のメインストリートだが、空き店舗率は四割に達するという。空き店舗等を活用し、創業支援と地域の賑わいづくりを。地方創生加速化交付金を活用した取り組みを紹介する。

市民によるモータースポット事業

二軒の空き店舗を借用・改修工事を行い、創業をめざす人たちに期間限定、週替わりで店を出してもらい、いろいろな経験を積んで創業にむずびつけてもらうというものである。九月六日に公開審査会を実施し、十月六日よりスタートしている。二次募集により三月十五日までの全事業者が決定した。

津島駅と津島神社をむすぶ天王通り中央に位置する店舗Aは二階建てで物販や教室系に利用でき、雑貨や手づくり作品の販売、パステル画やステンドグラスの制作体験、リラクゼーションなど九事業者が出店している。

つまテンポラリー

様々な一時 (temporary) の店舗を結集させる (rally) という意味を込め、プロポーザル時に提案したネーミングだ。今年度の事業で活用した空き家は四軒にすぎないが、このような取り組みを継続することにより、意欲的な人々をこのまちに呼び込むことが重要だと思う。

まちなか事業者育成事業
空き家となっている二軒の町家を活用し、インキュベーション施設としてこれから創業する人、創業後間もない人に提供しようというものである。

